

---

# ワールドエンドによろしく！

嘘月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ワールドエンドによるしぐく！

### 【著者名】

ZZワード

### 【作者名】 嘘月

嘘月

### 【あらすじ】

誰よりも理想主義者な偽現実主義者 彩瀬あやせ 翔生かなる ある日、彼は一人の夢げな少女と出会う。World End 彼女はそう名乗つた。翔生を中心に狂いだす世界。何気ない日常を世界の終わりから守る日々が始まる。

## w o r t h e n d (前書き)

初投稿をせてもらっています。至らぬ点だらけでしうが、生ぬるい田で見ていただけたらと思います。ご意見は真摯に受け止めたいと思つていますので、何か頂けたらと思つています。よろしくお願ひします。

風が吹いた。

少女の髪は流されて、形が無くなる。

酷く醜く人で混雜した交差点を滑らかに、流れるかのように避けながら。

誰かに触れる事なく踊るよう、「」、誰かを恐れるかのように慎重に。誰よりも世界を愛した少女が天を仰ぐ。

誰かが呟いた。

「世界が終わる」

そう呟いた気がした。

起立と礼を終えて放課後の教室を誰よりも早く出る。

季節は春から夏へ切り替わり、ようやく夏らしくなつてきた7月。汗ばんだ肌にYシャツという組み合わせは最高に気持ち悪い。

「じゃあな彩瀬<sup>あやせ</sup>」

「おう、またな」

高校2年生のこの時期は世間が騒がしくて嫌気が差す。

部活のインターハイ? 夏に向けて彼女ができました? 国立大学を目指して受験勉強?

クソくらえ

インターハイ行つてもプロになるのは一握りだ。社会の役に立つ?  
人並みに生きていたら人並みに挨拶も礼儀もできる。

彼女ができた？好きな人ができた？一時の感情に身を委ねて、感情の逃げ場を作つてただけに過ぎない。結婚前提か？結婚したら本当に幸せになれるのか？

レベルの高い大学に行つて満足か？そこでのお前は輝いているのか？くだらない能書きにしか頼れないガリ勉野郎か？

もつと現実を見る、何が効率的か何が利益になるか考えていけ。

……と言つても、主観的にも客観的にも一番損してゐるのはやっぱり俺だった。

友達を作るのは苦手ではない。年上と話すのも苦手ではない。世間と関わるのも苦じやない。理想を追い求めるのは誰よりも好きだつた。

俺 彩瀬翔生あやせ かなおは、誰よりも理想を追い求めていたに違ひない。バスケットボール部に入り、持ち前の運動神経と身長を活かし、チームのエースという座を手にした。

県のチームでは俺を知らない選手なんていなかつた。だからこそ、特待生としてこの高校に推薦で入学する事が出来た。この先俺は何処までも理想を追い求める、そんな事まで実感していたんだ。

そんな毎日に生き甲斐を感じていた矢先に、バスケットを始めるきっかけをくれた先輩が交通事故で手首を無くした。

彼のシートフォームはまるで理想そのものだつた。

そんな先輩が格好良くて、俺はバスケを始めた。

理想を求めて、何かに打ち込む日々が終わる音。

俺はバスケットなんか好きじやない事に気づいた。

俺が好きなのは理想を追い求める自分。

理想が朽ち果てた時、その理想を越えたような空虚が襲つた。何か一つを努力なしで終わらせてしまつたような、至極極まりない背徳感。

俺なんかよりもずっと素晴らしい選手で、俺なんかよりずっと将来性のあつた先輩、そんな先輩の両手首から先が空と交わっていた。

沈黙の続く病室の中でこう言われた。

「お前は俺のバスケをしてくれ、お前は俺だ。最後の希望つて奴のかもしれないな」

その言葉の重みに耐え切れなくなつた俺は、逃げるかのようにバスケ部をやめた。

わかつていた。先輩の求める理想を追いかけるべきだと。それが先輩への恩返しでもあって、先輩が望む理想だと。理想は何よりもリアルである。

何かを手に入れようとすれば何かを失い、ときには手に入れようとしたものさえ消えてなくなる。

先が見えているなら、最初からしなければ良かつた。

理想を失つた俺には何も無かつた。

きっとそのまま続けるという選択肢もあつたに違いない。それをしなかつたのは何故だろうか。

考えたくもなかつた。

高校1年生の冬に、俺は世界とやらを憎んだ。

それがこの捻くれた性格の理由。

これからもきっと、自分の首を絞め続けるだけの思い出になるだけなのだろう。

「なーに辛氣臭い顔してんだ！」

「！？……後ろから押すなよ、倒れるとこだったぞ」

「ははは、わりいわりい。どうよお茶でもしないか？我が親友」

「いや、いい」

「そんな気分じゃねえか……じゃあうち来いよ、お気に入りの格闘技見せてやるよ！まじすげえんだぜ！」

「こいつ、井上隆二<sup>いのうべきりゅうじ</sup>」は中学校からの友人で今も同じクラスの腐れ縁だ。俺がバスケ部をやめてから心配して余計に絡んでくるようになつたわけで、親友なんて大それたものではない。

井上は街の不良5人に絡まれても無傷だった、なんて噂もあり学校ではちよつとした有名人だ。

「お前と格闘技を見たら、俺がお前の技の餌食になるよな？いつもお前もかかつてこいよ！その方が盛り上がるだろ！」

「痛いのは嫌いだ。特に脳筋のお前となんて断固拒否する」

「それは残念だ、勉強のし過ぎは体に味噌だぞ？」

「……それを言うなら身体に毒な」

「あ、あー変わらないだろどつちでも」

「毒と味噌が変わらないなら日本人は妖怪か新人類なんだが。

「ま、いいや！もう少し楽しく生きよつぜ翔生」

「十分充実しているけど？」

「俺の目は誤魔化せねえよ。お前はもっと刺激を求めてる。違うか？」

「……お前の目も腐つたもんだな、刺激なんてリスクと同義語だ。

自分のリスクになる事なんて望んでいないさ。帰り際に理科実験室で防腐剤でも貰つて來い。ちゃんと注意事項読んで使えよ

「あ、あれえ？そこはもつとこつ……流石俺の親友、やっぱなんでもお見通しだな！的な流れだつたるお

「他人から出直して來い」

「そこからー？」

「……ありがとな」

「んー……そつか、また鑑賞会に誘つわ。じゃあな」  
また誘われるのか……そう思いながらもしっかりと馬鹿な友達と別れる。

下校途中の生徒の群れに混じり、何の捻りも無い背景へと身を委ねた。

刺激の強い楽しい人生……か。

そんな人生はたしかに魅力的だ。

ただ、それは成功例としてであつて、必ずしも、そのリスク、つまり犠牲を支払つて絶対に手に入れられる対価ではない。

そんなものには魅力がない。自分が頑張った分だけ落胆するならば、そんなものはただの悲劇でしかない。

酷く捻くれた性格にもそろそろ自己嫌悪し飽きていた。

何か世界を狂わすきっかけもあるハズもなく。

世界を変えたいだなんて妄言に誰も耳を傾けてくれない。

どこまでいっても、結局俺は理想に憧れ続けているだけだった。

いつも通りに騒がしい街の表通りへと差し掛かる。

下を向いて歩くサラリーマン、笑いながら帰る学生、こうして冷静に見るといつもあるのは現実。

裕福な国だ、平和な国だなんて世界で言われているが、結局それは隣の芝生って奴であつて……何が起こつてもきっとこの世界は変わらない。

そう、きっと……何も変わりはしないんだ。

「え？」

本物の風景の中に、今何かが“存在”した

たしかに、今非現実的な存在があつた気がした。

ここだと言わんばかりに主張するかのような違和感。  
真っ白い髪を靡<sup>なび</sup>かせて、踊るように人ごみを搔き分けていく。

そんな異質な存在に、誰一人目を向けなかつた。

何かに惹かれて、ただその白い軌跡を追うことにした、まだ暑い猛暑を奮う7月の良く晴れた日。

「私の事、見えるんだね」

俺は世界とやりとりで圧倒ついた。

## 廻り始めた世界

「私の事見えるんだねって……はは、どうこう意味だよ  
額から変な汗が出た。

周りの風景は、ただ日常を映して流れしていく。  
何も変わらないハズだ  
現に何も変わっていない。

それなのに身体が震える。まるで白昼にお化けでも見たような。  
そう……お化け？

「そのまんまの意味だよ、私を見る人は私を救ってくれる人。そ  
うでしょ？」

通行人が俺達を腫れ物でも見るような目で見る。  
いや、正確には”俺”だけを見ている。

目の前の少女……と言つても同じ位な年の訳だが、絶世の美女と言  
つても過言ではないこの子の方が人目を引くハズなのだが。  
どういう訳か、通行人は俺だけを、見ては見ぬ振りして遠ざかつて  
いく。

「なんなんだ……？」

まるで他の人には彼女は存在していないように、この女の子は明らかに現実離れしていた。

「初めてまして、世界の救世主さん？私は世界、ワールドエンドと言  
います。これからよろしくね？」

電波だ、完全に現実を見失っている。この子はどこか頭が可笑しい  
子なんだ、可哀想に。

「面白い遊びをしているね。でも俺は暇じゃないからまた今度」  
「え、ええ！？あ！そつか……えつと……人間にはハルマグドンつ  
て言った方が早いのかな？あれ？あれれ？」

「……」

「ひどいっ……商品裏のバー コードでも眺めるかのような眼差し……？」

「どうやら世界とやらは俗物に染まりきっているらしい。」

この調子じや当分先までこの世界は安泰だ。

早める足に必死に謎の少女は付いて来る。

「信じてください！たしかに今までの危機を救つてくれた方も、最初は似たような反応をしていました。だけどあんまりです……」

俺の他に何人に声を掛けているんだこいつ。

「あ、あの！聞いてます？無視ですか！？あれ？見えてない？おーいーーー！」

そう言つて目の前で両手を広げて振り回している。

「あの……本当に迷惑だからやめてくれよ。君といふと目立つて仕方ない。同じ学校の人には会つて変な噂が立つのも嫌なんだ」

少女は首を傾げて微笑んだ。

「大丈夫です。私を見えている人は貴方だけですよ？彩瀬翔生さん<sup>あやせかなみ</sup>」

「いい病院を紹介しよ……なんで俺の名前知ってるんだ？」

得意げに目前の少女は胸を張つて答えた。

「彩瀬翔生、17歳。私立 小波学園<sup>さきなみ</sup>2年生、文武両道、バスケットボールが仕事の現実主義者」

「え……？」

「小学4年生の頃に両親が海外へ、それ以来一人暮らし。妹は完全寮制の14歳、趣味は暴力」

おいおい。

「世界を変えたいと願う貴方の救済を、私、ワールドエンドは承諾します」

「何者だ？この女、俺のことは兎も角、妹の事を知つてるのは『ぐー部』のハズ。」

「私はワールドエンド、世界の終焉。人は私を神と呼び、宇宙と呼

び、空氣と呼び、歴史と呼び

少女が白く輝きだす。

その異様な姿にも、歩み往く人々の視線は止まらない。

「世界と呼びます。さあ、手を」

白く伸びた腕が、俺に向かつて差し出される。  
握つてしまいたくなる美しさに惑わされ……。

手を伸ばそうとした刹那、その手は宙を握つた。

「え？」

「え？」

少女は、得体の知れない黒い塊に飲み込まれていった。

「あ、れ？」

たしかに存在したハズだ。

一瞬の事で頭が状況に付いていけない。

「あ、あの！今ここにいた女の子何処に行きましたか！？」  
気が動転してか、近くにいた通行人に俺は尋ねていた。  
今、目の前で起きた出来事は、とてもじやないが信じ難い。  
すると、通行人の男は変なものでも見るかのように答えた。

「君さつきから一人で何喋つてるんだ？」

……つ！？

「な、何言つてんですか……今いたでしょ？一緒に俺と話してい  
た……白い髪の……綺麗な女の子が……」

白い髪の？綺麗な女の子？

果たしてそんな現実離れした女の子が、存在したのだろうか？  
男は首を傾げて、これ以上は時間の無駄と察したのか、何も言わず  
に去つて行つた。

日常が崩れていく予感がした。

間違いなくイレギュラー。

日常を狂わすだけの出来事を確信した。

それでも。

『これが夢なら』と、そう願えなかつた。

「ほんとに……なんだつたんだろうあの子」

『現在、樽宮市で起きている連續窃盜事件ですが、未だ犯人の消息は掴めていな模様です。警察によりますと、この事件には大規模な窃盜グループの関与が背景にあると見てているようです』

街中のスクーンが映し出すのは、毎度の『ごく同じよつ』ニュース。

女の子、黒い塊、世界の救済

考えれば考えるほど真実味がなく、本当に白昼夢だったのかもしない。

何とも言い換えない違和感だけを胸に、ただ帰宅する他なく、  
彩瀬翔生の一日は終わりを告げてしまつ。

二つの影があった。

一人はフードを被つた若い男。

そしてもう一人は、白色に靡く腰まであるストレートヘアの美少女。男は少女を大切に扱っていた。

五体満足、拘束もなく、机の上にはたくさんのお菓子と紅茶、部屋は歪に急いで取り繕つたような、一面のピンク。

呑気に紅茶を飲む少女と若い男を見て、誰がこれを誘拐と思つだろうか。

「ワールドエンドさん、そう氣を悪くしないでおくれ」

フードを被つた男はひたすら頭を下げる。

「いきなりこんな事をして本当にすまないと思つているよ」

「折角彼に信じてもらえたのにな……とんだ邪魔者だよ……」

「僕もこんな場所で”世界の終わり”と出会えるなんて思つてもいなくてね。少し強引でも、こうして話してみたかったんだよ。後悔はしていない」

少女は退屈そうに机の上のお菓子を転がして遊ぶ。

「初対面的人にする挨拶じゃないですね」

「どうも手癖が悪くてね……欲しいと願つたものはなんでも手に入れたいと思つてしまふんだよ」

部屋の隅に飾つてあるのは、どれもこれも高額な品ばかりだった。

「……あなたも能力者なの?」

「まあ、結構上手に使えるようになつたんだよ、ホラ」

そつ言つて何もない場所から黒い塊を出現させて、更に大量のお菓子を出して見せた。

「空間転移系ね、移動する物体の質量制限は飛び抜けてそうだけど

残念ね、貴方に用はないです

無関心とソッポを向ける少女にも、男は気にしていないようだ。

「それで私に何の用ですか？」

「あ、ああ！ そうだ！ そุดとも！」

男は初めて興奮したかのように、初めて感情を手に入れたかのよう  
に、目を見開いて話し出した。

「ワールドエンドなんて存在、僕は実際信じちゃいなかつた！ そん  
な話を聞いた時から疑つていたさ！ だけど違う！ 実際こうして目の  
前にしてみると信じみたくなる。君は一体なんなんだい？」

「私の事を誰から聞いたの？」

少女の顔からは、徐々に余裕が消えていた。

自分を知つてゐる事への恐怖が抑えれないようだつた。

「そんな事些細な事さ！ 僕は君を知りたい、なんで君がワールドエ  
ンドなんて呼ばれているのか？ 何故あの男が君を探してゐたのかを  
！ 知りたい！ 欲しい！ あの男が欲しがる君が欲しい！！」

男はこれまでにもなく喜び喘ぐ。

少女は窓の外を眺めた。

どうやら近くに遊園地があるようだ、ゆっくりと回り続ける観覧車  
を見ながら。

「…………私は…………」

少女は。

「なんだ今…………？」

頭が痛い。

無理矢理よくわからない映像を見せられたような感覚だつた。

時刻は深夜2時、横になつてから30分も経つていない。

帰り道での出来事もあり、余計に疲れているのだろうか。

……帰り道？

夢と呼んでいいのかも怪しい夢を思い出す。

白い髪の少女がいた。

ワールドエンド、そう男は言っていた。

急に嫌な予感がした。

でも、何処にいるんだ？

少女の視界、映つたのは観覧車、街のシンボルになつてている24時間回り続ける観覧車だった。

あの続きを、少女は何と言うのだろうか。

言ひようのない確信を胸に、翔生は家を飛び出す。

目的の場所、樽宮遊園地へ着く。

夢で見た角度を頭の中でトレースする。

近場で、高くなき建物、カーテンがなく、部屋の明かりは点いていて、とんでもなくメルヘン一色の……部屋。

「……本当にあつた」

3階建ての建物の窓は一つだけ、薄いピンク光が灯る部屋だった。階段を駆け上がり、インターほんを押す。

すぐに男の声がした。

「はい？」

こんな夜遅くにインターほんを押されて警戒している声。

「す、すみません！ ちょっとといいですか？」

咄嗟に上手い言い訳も出来るはずもなく、曖昧な訪ね方をしてしまつた。

ここで扉を開けてもらえなかつたらそれまでというの。 「ちょっと待つてください。今開けます」

「は、はい！」

すぐに扉が開く。

フードを被つた男が現れた。

「…？お前！」

勢いよく扉を閉めようとすると想定してた範囲だ。  
素早く足を扉に挟めて、閉めれないようにする。

「ちょっと中に入らせてもらいますよー」

無理矢理に扉を抉り開ける、腕力では勝つて思つてた  
より簡単に中に入ることが出来た。

男を押しのけ、リビングへと向かうと、そこには。

「あ、あなたは！やつぱり来てくれたんだね」

そこには、優雅に紅茶を飲む数時間前に出会つた少女がいた。

「よくわからないけど、あれ見せたの君なんだろ？」

「うん、私が見せました。信じて来てくれるかは半分半分だったんだけどね」

と悪戯に舌を出してウインクされる。

…………可愛いじゃねえか。

「どうして？」

「助けて欲しいと思つたから」

「知り合いじゃないのか？」

「全然、全く、これっぽっちも赤の他人」

赤の他人に、どうしたらこんな所に連れて来られるんだよ。

「とりあえず、此処から出るぞ」

「あ、うん」

少女は名残惜しそうに、ティーカップを机に置き、机の上のお菓子  
をワンピースのポケットの中へと仕舞つた。

「えへへ」

微笑んでる場合か。

「おいおい、勝手に人の家上がりこんできて大切な客を横取りなん  
て勘弁してくれよ……」

夢で見たフードの男は、どうやら冷静さを取り戻しているようだつ  
た。

「詳しい事情は知らねえけど、こいつは俺の客だつたハズだろ」

「つるさいな……」これだからガキは嫌いだ

男の前に50㌢程の黒い塊が出現した。

あまりにも現実離れした異質のものだった。

「なんだそれ……？」

「ん？ああ、知ってる。知ってるぞ。その顔」

愉快なものを見つけたように、男は笑う。

「Chainと出逢うのは初めてかな？少年」

「Chain？」

「世界を繋ぐ者、異能を持つ者はそう呼ばれているそうだ。……たしかに怖い。僕だって他のChainと出会えば怖くなるさ。恥ずかしがることはない、あまりにも現実離れしていて初めて見る奴は皆、例外なくそういう顔をする」

黒い球体が何かを吐き出す。

男はその黒い塊が吐き出した鈍色に輝くものを取り出し近づいてくる。

「んーこり辺じやこんなのしかないか」

出刃包丁を取り出して。

「まじかよ……」

馬鹿げている、なんでこんな事に巻き込まれてしているんだ？

昨日まで普通に過ごしていた、ただの高校生でしかない俺が何故こんな目にあつてるんだ？

男は目の前で止まり、大きく振りかぶる。

汚れ一つのない包丁が目の前に迫つて

「翔生！」

その声と同時に男の腰にタックルをして突き飛ばす。

「ぐつ！？」

「ぐつちー！」

少女の声のする方へ態勢を立て直して走る。  
無意識に手を取つて

手を

手が触れた。

۷

#

L

思考が記号化する。

急に頭が熱くなっ

急に目頭が熱くなり、涙が止まらない。

頭痛は一瞬で、頭の中へ雰囲気ときなし程の情報量が流れ込んでくる  
見たことのない風景、知らない人、学校で習った歴史。

その中に、白い髪の女の子がいた。

少女は一人

世界有史以來最暢銷的書

小説

その姿を見て  
救われたしと思つてしまつた

卷之三

身体が熱い。

意語が戻り、術式を振り返ると、男は僅ねがま

した。

繋いだ手を離さないようにしつかり握り、翔生はピンク一色に染まる部屋を飛び出した。

「お前……」

「よろしくね、翔生。私はワールドエンジニア、貴方は世界を繋ぐ者」

何をそんなに満足なのか、謎の美少女は満面の笑みで俺の手を握つた。

「それはせいい體したが」

必死に走つて逃げても、男が追つてくる様子はない。

冷静を取り戻し、この少女、ワールドエンドに尋ねる事にした。

「なあ、本当にお前は一体何者なんだ？なんであんな意味わからん化け物みたいな奴に誘拐されてんだ？」

質問の内容が可笑しかったのか、少女はくすくすと笑つて答えた。

「化け物なんて可哀想に、自虐ネタ？」

「自虐つて……俺はまともな高校生なんだが」

「それに、あの能力は汎用（utility）であつて、破壊（M  
urder）には程遠い出来だったから大丈夫」

どうやらあの手の奴らには、便利な汎用型の能力と、殺人的な能力と分かれているようだが出来ればマーダーとかいう破壊に属する奴には会いたくないな。

「大丈夫って言つても、一步間違えたらめつた刺しされてただろうよ」

「あ、あー……あはは……そうだよね」

「で？一体お前は何者なんだ？」

「ワールドエンド？」

「そう、それ」

「ん~そうだなあ……私は世界そのものの姿を体現したものなの、何百年もずっとこの世界を彷徨う観測者……と違うかな？傍観者の方がイメージつくかも」

どちらもイメージがつかない。

「世界のバランスが狂う出来事が起こると、私は私と契約してくれる人を探して世界のバランスを崩す要素を取り除くの」

「それって戦争とか？」

「ん~ちょっと違うかな？私にもその原因がよくわからないから、まずはそこからなんだけどね」

「信じ難い話ではあるが……あのさつきの黒い塊やら、お前と触れた時に感じたあの意味のわからん感覚、寝てるときに見た映像……嫌でも信じないといけない気がしてくるな」

「そうそう！あの時触れた時に感じたでしょ？世界を」

「どうやら、あの時見たのが世界とやらだつた。」

「酷く歪で、狂つて、醜悪で、それでいて美しい世界の歴史を。

「それが契約、私と触れた人が私を繋ぐ」

「ちょっと待て、契約？」

「そう、私を触れる事、そして見ること、声を聞くことが出来るのはChainと呼ばれる特殊な人たちだけ、普通の人が私に触れちゃうと私の中に取り込まれて、世界の一部としてこの世から消えてなくなつてしまふからね」

「そいつはトンデモ設定だな……待て待て。

「俺は何もないぞ？特殊な能力なんてないし、何か起こった身に覚えもない。特殊な性癖だつてない」

後者は嘘だけどな！

「私を見る事が出来た時点で、それは特殊なんだよ？そしてそれを私は救世主と判断するの」

「た、ただの偶然だ」

「そう、ただの偶然、だけどそれが重要な。世界を繋ぐなんて偶然の産物でしかないしね。そして私と触れた瞬間、翔生はChainになつた」

「は？」

「その能力が何なのかわからぬけどね。でも安心して！歴代の人たちはとっても強い人達ばかりだつたから。きっと翔生も例外でないハズ……！」

そんなに目をキラキラ輝かせて、期待の羨望で見られても困るんですけど。

「そんな触れただけで契約つて……さつきの男とはどうだつたんだ？」

「それは私の意志が働くからね。選ぶ権利くらい私にだつてあるんだから」

そう言つて少女はポケットから先ほど押借したお菓子を取り出し、袋を開けて口に運ぶ。

「うん！美味しい！やつぱりビスケットはいつの時代も絶品ね」「で、俺はどうしたらいいんだ？」

「世界をしゅくいま……しょ」

口の中にあるものを飲み込んでから喋ってくれ。

「世界を救いましょ！」

言い直した！？

「具体的に何をすればいいんだよ。心の準備だつて必要だし……正直8割以上理解出来ていない」

「うーん、まずは私を知つている人がいるつて事自体がイレギュラーダカラ……さっきの男とそれを教えた男を探し出す事かな」

俺を殺そつとした人を探して、わざわざもう一度殺されに行くのか

「次は殺されるかもしれないぞ、さっきのは何とかなつただけで」

「大丈夫大丈夫！」

「世界世界つて自分で言つてたけど、お前だつて元は人間だつたんだろう？」

「うーん……」

少女は少し考え。

「忘れちゃつた

と笑顔で答える。

俺には、その笑顔が何だかとても痛々しかつた。

それにしても……不自然。

あの時、あの男が帰り道の時のように同じ能力を使えば簡単に追いついてこれるハズだ。

帰り道、黒い塊の中に自分も入れて移動していたに違いないとなると。

「迂闊に家に帰つてないで正解だつたのかもしれないな」

「え？」

かなりの遠回りをして、近いうちに大きなショッピングモールが出来ると噂の人一人いない工事現場へ移動した甲斐があつた。

黒い塊が目の前から出現し、中からフードを被つた男が現れた。

「わざわざこんな人気のない場所にすまないね」

右手にはさつきと同じ包丁を持っていた。

「やっぱり付いて来てたのか、お前ワールドエンドをビリするつもりだったんだ？」

「どうもこうもないよ、僕はただのコレクター。今この街で話題になっている連續窃盗事件も僕の仕業でね……欲しいという衝動から連れられないんだ」

「欲しい？ ただそれだけの為に？」

「本当にすまない。謝罪の気持ちでいっぱいだけど……君を殺してもソレが欲しいんだ。僕よりたくさん色々なものを持っているあの男を越えるにはソレしかない」

「その男ってのは誰なんだ？」

「神代<sup>かくみ</sup>と名乗つてたな、一度しか会つたことないからそれ以上は知らない。だが、あの男は異質だった。その男が欲しがるソレを譲つてくれっ！！！」

男がナイフを両手で握り締め、走つてくる。

「らあああああああああ！！！」

あまりにも不手際でいて、大胆。

避けることは容易い。

ただ、避けた時に気付く、後ろに下がらせたワールドエンドがいた事を。

「あ

ズブリ、と今まで聞いた事のない音が響いた。

少女の細い身体には禍々しそうな一刺し、月夜に照らされたながら、くの字に少女は痙攣した。

断末魔すら無く、身体を貫いていた刃物を引き抜かれてからは、糸

の切れた人形のようにだらしなく倒れこんだ。

触れた時に見た少女の記憶を探る。

救つてあげようと思つてしまつた自分のなんて愚かさ、無力さ。

嗚呼、俺は結局は何が起こつても、何かが起ころうとしても無力だ。それと同時に湧き出る怒り、これを怒りと呼ばずに何と呼ぶのだろうか。

出逢つて間もない人の為に、俺はこんなにも想つてやれるんだ。

「ははは…………ほんとこちゅぢゅぢたぞ……くくく、あはははは  
ははは……！」

笑い転げる男を余所に、頭の中では目前のフードを被つた男を殴り飛ばす事ばかりイメージしていた。

想像の中の自分は有り得ない速度で走つて男を殴り、その衝撃で昔よく見た特撮の悪役みたいに吹つ飛び込んだ。

それが理想だった。

#### 『理想到達』

結論から言つと、ビリヤリそれが俺のじゅうとうとしての力だった。

走る、走る。

自分でも信じられない速度で一瞬にして男と距離を詰める。

理想と違うのは相手が動く事と考えたが、そのスピードに反応しきれていない男は動く事も出来ていないようだ。

「なつ！？」

男が言葉を発する前にすでに拳は男の腹にめり込んでいた。そのまま男は後ろにある砂場まで吹つ飛び倒れた。

「なんだ今……？」

「それが翔生の能力」

「生きてんのか？」

「生きてんのか？」

駆け寄り刺された傷口を見るが損傷はない。

「私は世界そのもの、これくらいの干渉じゃ 大丈夫だけど……」  
ワールドエンドはワードの男の所まで歩み寄り、その男の胸の上に手を置いた。

「世界に何らかの干渉をしてしまった彼は残念だけど、この世界から退場だね」

男は薄い光の結晶となつて、少女の身体へと吸収されていった。  
「何やつたんだ……？」

「世界を脅かした危険分子として、ワールドレコードといづ記憶媒体に登録されてしまったの、彼は」

「ワールドレコード……？」

「世界の記録、ブラックリストとも言えるし、宗教的概念だと輪廻と呼んだり、生まれ変わるなんて表現のされ方もあるね」  
「死んだって事か？」

「それは直接的な言い回し過ぎるけど、そうだね。そういう事になるのかな」

「そんな……残酷すぎる……」

「そう、残酷。とても残酷なの。だからそれを覚えているのは私だけでいいの」

この顔だ。

『「私だけが知っている』そういう顔を、触れた時にも、あの夢の中でも、何度も、見た。

夢の中で聞いた『私は……』その先に続く言葉を自然と予感していた。

「私はワールドエンド、この身体は墓場。森羅万象を世界といづ名の墓場に隠す秘密の器なの。そしてその世界の危機という事は、近いうちにこの世界の理が乱れ、この世界が消えてなくなってしまう恐れがあるという事」

世界を救うなんて改めて普通じゃない。

だけど、自分だけにしか出来ない事を見つけてしまった。

これは特別な事であって、とんでもなく、現実主義から程遠い。

さつき手を握った時に言わなかつた言葉を少女へ贈つた。

「よろしくな、ワールドエンド」

結局昨日は家に着いたのが朝日が昇る頃だつたせいか、起きてみれば正午。

今日が土曜日で本当に良かった。

そのまま、ワールドエンドを家に連れて来て、空き部屋を一つ貸した。

大きい家とは言えないが、俺一人で住むにはあまりにも大き過ぎる。何度も、何度も昨日（正しくは、今日なのだが）起こつた出来事を思い出す。

突然やつてきた非日常にも冷静でいられた、あの瞬間までは。

ワールドエンドが刺された瞬間に沸き起つて、怒りと悲哀の葛藤。決して感情移入できる程の間柄ではない、それなのに何かをしてあげようと願い、実行した。

俺を動かしているのはいつも怒りというスイッチだったんだ。  
憎しみ、恨み、妬み、怒り狂う、酷く醜悪な人間だ。

「そういうや、お前普段何処で寝泊りしてんだよ。まさか野宿か？」  
食卓に座る白い少女は、当たり前のよう答える。

「私は常に移動し続ける事が出来るからね。無意識の移動で世界の声を聞けるから、人が必要とする欲求は遮断できるの」  
と、人知を超えてると言わんばかりの説明つぶりだが、どうしたものか。

「そのわりには、よく食うな」

簡単に目玉焼き、タコさんワインナー（本人の希望）、米、だけでは物足りず、冷蔵庫にあつた焼きソバすらも平らげていた。

「正直理解できねえけど……まあいいか」

どちらどう見ても、ただの若い女の子なのだが彼女も彼女で色々と大変だといつのは理解したつもりだ。

ワールドエンド、世界の意思として実体化した人間が言う神……ん  
? そういうえば。

「そういうえば、名前はないのか? ワールドエンドなんて正直呼びにくくい」

「翔生はホントに”希少メン”だね!」

「人を勝手に珍しい男にするな……几帳面の事だろ?」

「それ!」

本当に大丈夫なのか? この世界。

「なんか呼びやすい名前ないのかよ。その名前で呼ぶにも、他の人に聞かれちゃ不味いだろ? 先ず呼び難い。更に可愛さの欠片もない、なんだよワールドエンドって。絶対に呼び難い。もう一つおまけに呼び難いし、最後に言つとかなり呼び難い」

「あああああ! もおおおー! うるさい! 翔生! 呼び難い呼び難い言わないでよ!」これじゃあ”八面楚歌”だよ!」

そんな楚歌は、歴史に載るのも恥ずかしいただの弱いものいじめですよ。

世界とやらは歴史が苦手のようだ。

もう一度言つ。

大丈夫なのか?」の世界。

「まあ、あるにはあるんだけどね」

と、何処か遠くを見るような田で最初の質問について答えた。

「言いたくないならいいぞ」

何となくだが、この少女はその問いには答えたくないんじゃない? そんな気がしたんだ。

「ずっと昔の事だから、これが本当の名前かも定かじやないんだけどね。私の中で覚えてる名前は一つだけあるよ。…………アリシア」少女は噛み締めるようにその名前を呟いた。

大切なものを扱うよ!」

「でもね、私の名前なんて誰も呼んでくれないの。翔生もきっといつかは忘れてしまつ」

「名前なんてそう簡単に忘れないだろ。嫌でもこんな出会い方した奴の名前なんて忘れないと思うね」

少女は何かを思い出すように答える。

「嫌でも忘れちゃうの、私の事なんて、世界の事なんてね……」

駄目だ、俺は「イツの」に「いつ」と「ころ」が苦手らしい。

「アリシア」

「ん？」

「アリシア、アリシア、アリシア、アリシア、アリシア、アリシア、アリシア」

「ど、どうしたの？ 壊れちゃったの！？」

「覚えたぞ、お前はアリシアだ」

少女は目を見開いて、初めて大声で笑った。

「あはははは、ホントに面白いね。君っていう人間は」「別に俺は……」

インター ホンのチャイムが鳴った。

「ちやいむ！」

「そう、チャイムだ」

昨日ワールドエンド……アリシアには色々と生活していく上でのルールを説明した。

チャイムが鳴つたらお客様さんだから、迎えに行くのが今の世界のルールっていう話を覚えていたのだろうか。  
どうやら彼ら世界の意思でも、現代には疎い部分も色々あるようだ。

まあ、居留守という究極奥義もあるのだが、それは追々教えよう。

「ちやいむがきたら迎えに行く！」

「そうだ」

待て、待て待て待て待て

駆け足で扉まで向かうアリシア。

「おい！ 待て！ ストップ！」

「お客様ちょっと待っててくださいねー！」

昨日言つた教えを守つて偉いけど、お前に言つてるんだよ…

近所の人に女の子と一緒にいる事がバレたら厄介過ぎる。

あ、でもアリシアは普通の人たちには見えないんだつたな……だつたら勝手にドアが開いた様に見えてしまうのか！？

急いで玄関へ向かう、待つてくれ頼む、きっと明日にはこの家は幽靈屋敷として有名に

「翔ちゃん……この子……誰？」

良かった……見えてるようななら幽靈屋敷としての汚名は逃れられ……ん？

「この……子？」

訪問者であり、幼馴染の天野 月海つぐみはアリシアを指差し蒼白してい

る。

「私はワールツ」

俺はこの世界の口を開ざし、奥へ連れて行く。

「ちょっと待つてくれ月海」

「え？」

こいつには聞きたいことがある。

「ふはあ！苦しかったんだけど！」

アリシアの口から手を放し、俺は小声で問いただす。

「おい、ワールドエンドってのは世界破滅の介入者にしか見えないんじゃなかつたのかよ」

「そうだよ？」

「だつたらなんで俺の幼馴染の月海が見えるんだよ！…」

「翔生と契約したら受肉したようなものだよ？全世界の人たちは世界とリンクするの。私と契約した時点で、この世界の情報の器が満たされた状態になつて」

「もういい、サッパリわからんけど、お前はみんなから認識されるようになつたんだな？」

「うん」

「それを早く言つてくれ……」

「わかった」

何の悪びれた様子もない。

「いじで大人しくしてろ」

「うん」

玄関に戻ると、月海からの質問攻めだった。

「どうして？どうして女の子と一緒になの？それに凄く綺麗な人だつたし、外人さん？彼女！？」

「落ち着こう…… アイツは親戚だ」

「親戚に外人さんがいるの！？」

「親戚の養子で、俺もたまにしか逢つたことが無くてな……つい最近その親戚が他界してしまつたんだ。だからとりあえずウチで預かることになった」

すまん、親戚の秀樹おじさん（34）

「そ、そうだつたんだ…… 大変だね」

「それで、今日はどうしたんだ？」

「えっとね、作りすぎちゃつたカレー持つてきたんだ」

そう言って小さい鍋を出した。

たまに月海は、作りすぎちゃつたと言つて料理をお裾分けしてくれるんだか、結構な頻度で作りすぎちゃうドジ娘だ。

「また作りすぎたのかよ、もつと少なめに作った方がいいんじゃないかな？」

「あ、あはは…… そ、そうだね」

「まあ、ありがとな」

「いいのいいの！じゃ、じゃ、じゃあ私はこ、こ、こ、これでええええええ！」

酷く動搖した様子でいなくなってしまったけど、大丈夫だろうか。

まあ、徒歩5分くらいの距離だし心配もいらないな。  
ちなみに、翔ちゃんとは、名前あら取つたあだ名らしい、その呼び方

だと全く別の人物になつてしまつただが。

夕食までアリシアから色々な事を聞くことが出来た。

サムライという人たちが存在した時代の話、とてつもなく名前の長い現代では有名過ぎる画家の話、何度も破滅と再生を繰り返すアジアの国の人々、蒸気機関車を初めて乗ったのは私と自慢もしていた。どれもが授業で習ったように似ていて、どれもが今まで教わってきた真実とは似て非なるものだった。

これを世界の真理と呼ぶのだろうか、自分だけに知らされた真実であって、とても知り合いに話せる内容ではないが。

契約の為に信じてもらおうと皆治をして、最後には火炙りになったフランスの聖処女。

どの話を聞いても、歴史の背景にはこの少女は存在していた。

すっかり暗くなつた夕方、カレーを食べながらも少女との会話は止む事はなかつた。

「そういえば、今まで契約してた奴らつてどんな能力を持つてたんだ？」

「ん~、なんか大きな龍を出したたりー、なんか滅茶苦茶にする人とかー、あ、あの時は街が一つ消えて大騒ぎだつたねーあはは

「……」

先人の英雄は重度の武闘派だつたようだ。

「俺の能力……か」

あの時感じた強い渴望、理想を手にしたあの感覚が忘れられない、家に帰つてからも何回かイメージしてみたが、あんなに早くは動けなかつた。

「制御と発動は慣れだからね。仕方ないよ

「俺の能力ってのはどうなんだ?今までの中で」

アリシアは悪びれた様子も無く素直な意見で答えた。

「ふつー」

そう言ってカレーを口へと運ぶ。

世界は俺の事よりも、カレーの方が大事なようだ。

「なんだよ普通って……」

カラソツ

とアリシアが握っていたスプーンが床に落ちた。

「おいおい、床が汚れるだ……」

ろ？

アリシアは光の無い目で立ち上がり、機械的に空虚を見た。

「アリシア？」

「近くにいる」

光を瞳に戻し、口の周りにカレーを付けて短く言った。

「近くでChainが能力を使ったみたい」

## 金色の獣

アリシアの性質上、近場での能力は感知できるらしく、その性質をあてにしてその正体を突き止めることにした。

「Cheriaってのは全て例外なく敵って訳じゃないんだろ?」

「うん、だけど変な感じがするの」

「変な感じ?」

「何て言えばいいかわからないけど、とても痛々しい叫びだった」

「ふうん……そんな事までわかるのか」

アリシアの話によると、ここから反応があつたらしいが……。

「ウチの学校じゃねえかよ……」

私立小波学園、伝統のある学校として有名であるが建物自体は6年前に工事によつて新校舎となつてゐる。

「ひつち!」

「あ、おい!」

校門から中庭の方へと向かうアリシアを追いかけ、そこで立ち止まる。

「なんだこれ……」

獵奇的、そう感じた。

暗くてよく見えないが、きっと死体は一つ。

腕が地面に吸い込まれたように突き刺さり、足が木の枝に引っかかっている。

これを死体と言わざして何と言つのだろつか。

その中心にはこの暗闇でもハツキリとわかる金の髪の青年。

歳は同じくらいだろうか、長く伸びた金の髪に肌蹴たYシャツ、ズボンは闇に溶けている様に黒く、腰に銀の逆十字がぶら下がつていた。

捕食動物のような鋭い瞳が俺とアリシアを捉えた。

「ン? 隨分と今日は客が多いナ

身体が動かない、田の前の異常な光景に吐き気がしたが、そんな場合じゃない。

この男はきっと俺たちを殺す、そう確信した。

ゆっくりと歩み寄つてくる男、後退りさえ出来ない。

「な、何してたんだよお前」

やつとの事で紡いだ言葉は恐怖で震えていた。

「何つて言われてもなア」

金髪の男は困ったように死体を見て。

「死体が二つあるナ」

何の感慨もなく、何の抵抗もなく、ソレを蹴飛ばした。

「貴方が能力を使つたの？」

「ア？」

アリシアがいつの間にか前へ出て、男と話していた。

「ンー？なんだこのすげー美少女？外人？」

「アリシア！下がれ！」

俺は最大限の声でアリシアへと叫んだ。

「アー、アリシアちゃんつて言うのかア、へえー探査系の能力？」

男は目の前の少女と話し続ける。

「いいなア、探査系。俺もこんな能力じゃなくて探査系が良かつた

ヨー、その転がってる男なんて俺に向かつて何て言ったと思ウ？

マーダーだつてヨ、失礼な奴だよナ。俺は狂つてなんかねえのに

サ

「何の為にこんな事したの？場合によつては世界のバランスを乱したと私は判断します」

そんなアリシアの声も全然響いていないようだ。

「バランスねエ……そんなもんこの世界にあるのかネ。何の為つて言わても色々あるシ。まあいいか……警察に言われても面倒くさいシ？死んでもらおうかナ？」

男は金色の髪を揺らしながら疾走した。  
迅速、文字通りの速さだった。

木を蹴り、アリシアを越え、翔生の首を掴みかかる、目の前の少女よりも男から始末するという見事なまでに慣れた思考回路だった。

「あつ……がつ」

首を絞められ、視界が赤く染まる。

目の前の男の握力は、まるで万力で絞められているかのようだった。

「翔生！」

アリシアが駆け寄つてくる。

「馬……鹿がつ！逃げ……る！！」

逃げる？逃がしてどうする？こんな化け物みたいな奴から逃げれるのか？アイツ一人で。

一人……？待てよ？

ブラックアウトしそうな視界の中、急に何かが引っかかった。

身体は言う事を聞かないが思考回路は正常に作動する。

さっきからこの男は”自分が殺した”とはハッキリ言つていない。それに、何か隠しているような”うやむや”な回答だった。

「お……前の……他に……誰が……いた？」

「ア？」

急に力を込められていた手が緩み、開放された。

「がはつ……げほつごほつ……はあ……はあ……」

ありつたけの酸素を補充したが、赤みの掛かった視界の回復にはまだかかりそうだ。

「なんで知つてんダ？ここに俺以外の人間がいた事」

男は素直に驚いた顔をしていた。

「アリシア、Chainってのは複数の能力を持つことが可能か？」

「え？ううん、そんなのは例外すぎて聞いたことがない……かな？」

「あの死体、地面に埋まってる死体と、切断された死体の二つがある。どちらも性質上全く別だ、そう考えればもう一人、誰かいたつて不自然じゃないだろ」

「かハカの出鱈目を言ってみて本当によかつた。

視界は徐々に良好になつてている。

酸素が足りなく、身体に力が入らなかつたがそれも回復していた。

「へエ、頭はいいの力」

男は関心したように、もう一度翔生へと手を伸ばす。これだけ時間を稼げば十分だつた。

想像する。

さつきの男を、自分を。

理想を越えるんだ。

身体中の血液が沸騰するような錯覚。

男の手から一瞬で逃れ、アリシアを抱きかかえて移動した。

「翔生？」

「今日はちゃんと下がつてろよ」

「へエ、やつぱりchainだった力」

怖い、恐怖が身体を支配している、だが先ほど男に掴まれて意識が遠のく時に感じたものよりは遙かに軽い。

「俺と同じくらい早いナ」

男も疾走する、その姿を目で追い、距離を取りながらスキを伺う。

「でもなア、早いだけじゃ駄目ダ」

男は急に止まり、晒わらう。

知つてる、この目は自分が常に優越だと疑わない顔だ。

このチャンスを逃すわけにはいかない。

「翔生！駄目！！」

拳を作り、男の顔の前で

スローになつた。

周りの風景は変わらず、目の前の男の身体には遅延した様子がない。

「なんだ……？これ……？」

自分の身体だけが遅延している。体内時間も問題がない、身体が思うように動かなかつた。

「ハハハハハ！馬鹿だナ？自分で一つ能力がどうこうって言つてただ口？俺の能力が身体能力強化だとでも思つたの力？とんだお氣楽ご都合主義だナ」

完全にそう思つていた。

あんな速度で動けるのは能力だと、勝手に決め付けていた。

「残念だつたナ、素人。俺の重力からは逃れられないゾ」

男は移動する方向に対して、逆の力の重力をかけ、物体が動く力の

働きを相殺していた。

「死んでくれ」

男の拳には重力の渦が巻いている。

その拳が振り下ろされる刹那。

まだ、理想を追っていた。

この重力を越える速度と力、世界の理から外れる規格外。

「ンだよ……それ

男の拳より早く、男の顔へと腕を伸ばす。

「！？がばつ」

「えー、…！」

翔生の想像以上に、男のパンチは早かつたようで掠つてしまつた。  
軽く掠つただけのハズが、軽い脳震盪になつていて、足から力が抜  
けて倒れてしまつた。

まともに餘りつてこたりと思つと寒氣がする。

男の方を見ると、男は片膝をついていた。男こも羽生の拳が効いているようだ。

黒川昇の筆力交際

「藤をついた板が、独り壇をあらへ向かを茲も續けて一。」

「ブッ ゴロスブッ ゴロスブッ ゴロスブッ ゴロスブッ ゴロ

スブッコロスブッコロスブッコロスブッコロス

咲文のよへに紡かれる負の感情が翔生  
男は立ち上がり、また歩み寄つてくる。

これが、実戦の違いだらうか？

翔生は意識を保つ事に精一杯で、立ち上がることも出来なかつた。

「待つて！」

アリシアがまた何か言つてゐるようだ。

意識が薄れ始めていく。

「黙れ、殺すゾ」

「あなたの探してゐる人、私なら見つけるかもしれないよ?」

世界は誰に対しても平等に手を差し伸べるんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9669z/>

---

ワールドエンドによろしく！

2012年1月5日21時00分発行